

庄内協同ファームだより

No.151 2014年5月号



発行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaifarm.com

これからは君達の時代

早いもので、庄内協同ファームは今年25周年の節目の年を迎える。6月の記念式典に向けて組合員一丸となって準備をしているのだが、その中で私は記念誌づくりに携わることになり、前身である庄内農民レポート時代から数えて約35年分の膨大な資料を改めて読み返すことに一冬を費やした。

僕ら団塊世代が20代の頃は、丁度減反政策が始まり、これからの農業はどうなっていくのだろうという不安が渦巻いていた。仲間と熱く議論し減茶苦茶に突っ走ってきた結果が、自分達の米を加工して自分達で売るといふ今のスタイルを創ってきたのだと思う。そんな僕らも60代。次世代へバトンを渡しエールを送りたいと青年部の若者達の座談会を企画した。オヤジ世代がいると本音は話せないだろうからと、秋田県立大学の谷口吉光先生にコーディネーターをお願い、青年達の想いを引き出していたいた。

青年らはみな真面目で、受託によって増えた田んぼ

や有機栽培のような手間暇をかける農法を懸命に取り組んでいる。忙しすぎて眠るだけが楽しみなんていう声も聞かれ、農業人口が減少したことで、彼らの肩に様々な地域の仕事へのしかり気持ちを重ねてしまっているのだと感じた。愚痴が多く出たところで谷口先生が一言。「どんな仕事も辛いものです。そして、その辛さはこれからも続くのです。辛さの先にどんな光を見つければいいのか。もともと自分と向き合って。」とピシヤリ。

しかし、もう自分の課題や方法は見えているのだと感じた。まだやっていないだけだ。固執するイデオロギーがない分、ブログやフェイスブックで誰とでも軽々と繋がっていきけるのは僕ら世代には出来ない事だ。自分や自分の家に良いものを十分持つているのに、それを認識出来ないがために自信を持っていないのだ。

自分の強みを自覚するには自分の家の経営を数字でつかむことが大切。技術面では良いと思ったらどんどん取り入れる。金が無ければどうやったら可能になるのか工夫する。いろんな人と出会い、自分の指標となる先輩をもつことも大事。自信がないことに悩むな！誰も君達を笑う事が出来るヤツなんていないんだ。だって僕らも昔そんな青年だったから。協同ファームを背負うなんて考えなくたっていいんだ。失敗から学び、仲間と一緒に何かを創る楽しさ、人と繋がることの面白さを感じてほしい。舞台はすでにある。ここで自分達らしい農の生き方を思いっきり試してほしい。これからは、君達の時代なんだ。



谷口先生と青年部メンバー

富樫英治

孟宗汁



第14回 庄内協同ファーム生産者集会

阿部正雄

2月27日に藤島四季の里楽々にて第14回庄内協同ファーム生産者集会が開催されました。

午前中は2013年度の活動報告と2014年度の活動計画についてそれぞれの委員会、部会より発表をしてもらいました。

午後からは、あいコープふくしまの理事長佐藤孝之氏、株式会社秋田テクノデザインの今井淳容氏、山形県農業総合研究センター水田農業試験場の安藤正氏の3名より講演をいただきました。

あいコープふくしまの佐藤理事長には「福島の実状と私達が取り組んできた事」と題して震災から3年経過した今でもまだ多くの問題が残っている現状や、あいコープふくしまの活動を、広報や写真を使いながらお話しいただきました。昨年より行っている庄内協同ファームとの餅つき交流会も大好評との事でした。少しずつ復興してきていると言いながらもまだまだ大変な状況であるということを知ることが出来ました。

株式会社秋田テクノデザインの今井氏には「ブラシローラー型水田除草ロボットの現状」についてお話し

いただきました。実際にホバークラフト型のボートにブラシローラーのついた除草ロボット(写真右)を持ってきてもらい、駐車場



で動かしていただきました。時期的なこともあり、田圃での実演とはいきませんでした。講演では実際に除草している動画を見ながら話を聞くことができ、有機栽培の一番の問題点である除草作業の新たな時代を感じました。

最後に水田農業試験場の安藤氏より「水稻有機農業に関する試験研究成果報告」について、これまでの有機栽培に関連した様々な試験結果のデータを使った講演をいただきました。

第14回生産者集会は終了いたしました。1年の事業を振り返り、新たな情報の収集を行い、新年度への第一歩となる一日でした。



山形県農業総合研究センター
水田農業試験場の安藤正氏



あいコープふくしまの理事長 佐藤孝之氏



株式会社秋田テクノデザインの今井淳容氏

山形県有機農業技術研究会開催される 小野寺 仁志

3月14日(金)に山形大学農学部(鶴岡市)を会場に「平成25年度山形県有機農業技術研究会」が開催されました。県内の有機農業実践者やその組織、大学・試験研究機関、市・県の行政関係者等の参加出席がありました。

最初に遊佐町共同開発米部会長の菅原英児氏による「食を繋ぐ者たちの奇跡 ～持続可能な地域社会を目指して～」と題し、40年以上も続いている関東の生協との提携を通して町ぐるみで取り組む環境保全農業の実

践発表。その後、県農業総合研究センター食の安全研究部、横山克至氏による「県内の有機栽培等水田における生物多様性の指標生物やその他の生き物について」の報告、続いて山形大学農学部の先生方による研究報告が続き、いずれも水稻の有機栽培に関するもので、環境に与える影響や栽培技術等の研究報告でまだまだ問題点が多いものの確実に前進していると実感されました。

むぎぢちゃん



「この麦をパパが麦茶にしているんだよ。」買い物に向かう車の後ろで、五才になる娘が外を指差

しながら二つ下の弟に教えています。そこは庄内協同ファームの近くに広がる麦畑。組合員の皆さんが育てた麦を焙煎するように三年が経ちました。仕事とはいえ夏場の忙しい時期には麦茶の芳香剤のような体になって家に帰ります。子どもたちは「なんか匂う。」と面白がってクンクンしながらよってきます。いつも飲んでいる麦茶ですが、我が家の子どもたちには特別な想いがあるようです。

そしてこの麦茶、私にも特別な想いで作る理由があります。それはいつも顔を会わせている生産農家のお父さんたちがお客さんと顔を会わせたときに心から自信を持って薦められる商品に仕上げることです。麦茶というものは煎りが浅ければ香りが弱く、煎り過ぎるとこげができます。ひとたび焙煎を始めれば、気温や湿度も勘案しながら最高の状態を見極める緊張作業が続きます。大変な仕事ですが、心の中ではお父さんたちが応援してくれると思って頑張っています。

この麦茶はそれぞれの作り手がお互いを意識しあうことで、より美味しくなるのかもしれない。皆さんも私たちのことを少しだけ思い浮かべて飲んでいただければ、特別な味になるかもしれませんね。

正田友己

うるちっ粉 もちっ粉

庄内協同ファームにはお米をそのまま粉にした商品があります。

「うるちっ粉」と

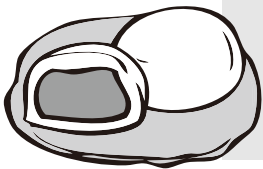
「もちっ粉」の2種類です。それぞれうるち

米ともち米を製粉したものです。

今回は「もちっ粉」を使ったレシピを紹介します。



大福 (6~7個分)



材料	もちっ粉	100g	} ☆
	砂糖	80~100g	
	塩	小さじ1/2	
	水	190cc	
	片栗粉	適量	
	あんこ	250~300g	

作り方

- ① ☆を全て耐熱ボウルに入れ、ダマがなくなるまで混ぜる。
- ② ラップを被せて、電子レンジ600Wで3分間加熱する。
- ③ もう一度よく混ぜ、再度電子レンジ600Wで3分間加熱する。
- ④ もう一度よく混ぜ、片栗粉を敷いたバットへ6~7個ちぎり分け、あんこを包んで出来上がり。

※機種により加減が異なります。熱の通り具合を見ながら調整してください。

「つるおか桃の節句郷土料理教室」

小野寺美佐子

3月3日江戸川で行われた「つるおか桃の節句郷土料理教室」に行ってきました。メンバーは、鶴岡の産直しゃきっと・あぐり・あさひグー、鶴岡市有機農業推進協議会です。

江戸川からの料理教室の参加者は26名。鶴岡と江戸川東京事務所の人達と合わせ総勢40数名の教室です。メニューはゴマ豆腐のあんかけ、孟宗汁、ぜんまい煮、菜の花の辛し和え、三色雛寿司です。6テーブルに分かれ、各産直の人達が先生となり一緒に作りました。

私は雛寿司の40数人分の担当です。実はメニューを見たとき私が「雛膳にしてはちょっと寂しいですね。」と余計な事を言ったものですから、結果私に役が回ってきて、一人で全員分を作ることになってしまいました。大変ではありますが頑張りました。おかげさまで教室は大盛り上がりです。和気あいあい楽しい雰囲気

で教室を終えることが出来ました。

今回ファームからの販売品はありませんでしたので、料理説明の時に試飲して頂いた麦茶のアピールをさせて頂きました。夜は上野にある韓国料理満奈多での商品開発交流、翌日は山形のアンテナショップおいしい山形プラザ。帝国劇場地下にあるタニタ食堂と慌ただしい日程をこなして帰路につきました。



ペンリレ

徒然草

工藤 祐生

「春眠暁を覚えず？」



今年の冬は全国的には大雪だったものの、庄内地方では例年より比較的暖かく、雪かきも少なくて済む冬でした。そのお蔭でいつもよりゆつたりと過ごせた冬が終わり：今は4月。気温・地温ともに暖かくなり冬眠していた虫たちも起き始め、時はまさに「春」！農家にとっては喜ばしい反面、農繁期突入で忙しい日々がやってきます。

まずは冬の間に怠けた体を春夏仕様にしなければいけません。「春はお仕事も沢山あるし早起きしなければ…」と思うの



ですがこれが眠い眠い：(笑)。毎日毎朝お布団のお代官様に「良いではないか〜良いでわないかあ〜」と誘惑されて「後5分：後5分：zzz」と、ついつい負けてしまっています。

頭の中では早起きしなければ！と考えているので寝る前に何個も目覚まし時計をセットして就寝しているのですが：無意識のうちに全て止めてしまい、結局ギリギリの時間に起きてしまっています。しかしながら、どうしても寝坊できない用事が朝にあるときは目覚ましよりもしつかり早く起きています。心の中、奥底で冬仕様の怠け心があるのでしよう。一旦、体が起きてしまえば後はやる気満々なのですがそこに至るまでが辛い…。

まさに「春眠暁を覚えず」状態です。そういういえばこの言葉、今となつては「春の夜は短い上に寝心地よく、朝になつても眠くなかなか目がさめない。」と言った意味で多く使われています。自分も学生の頃、古文・漢文の授業でそのように教わった記憶があります。どうやら本来の意味は少し違うようです。「春になつて夜明けが早くなつて、日の出に気が付かなかった。」または、「冬の寒さのせいで夜明けに目が覚めなくても済む暖かさになった。」と言った意味の方が近いと思います。解釈の違いかもしれませんが、作者の孟浩然の生きた時代を考えると、当時は正確な時計も口く暖房もなかった頃ですし、後者の方が

しつくりときますね。個人的には「眠い眠い」と言った前者の現代風庶民的なアレンジの方が親近感が湧いて好みですが(笑)。この頃の春らしい陽気は「絶好の農作業日和だなー。」と思うと同時に「この天気の良い日に《春眠不覺暁》どころか日中に仕事なんかせず寝ていたらどんなに気持ちいいかなあ〜。」と思うことがあります。とは言え、農家にとってこれからは一年でも有数な忙しい農繁期！種まき・耕起・田植えとイベント目白押しでそんな風に怠けている暇などありません！早く怠け心を叩き出して稼がねば！今年も美味しいお米を作るために頑張るぞ〜！

「働く農機具」 乗用田植え機

10年前は歩行用田植え機で朝から晩まで10日間位かけて4町歩を植えていた。現在は画像の乗用田植え機。一度に6列を植えることができ、6日位で8町歩を楽々植え終わる。スピードも速く植えた後もきれいに仕上がる。



あとがき



ゴールデンウィークの5月3日には私の実家でお祭りがあり、神楽が村内を練り歩き、祝い事がある家庭には、家内安全や子孫繁栄を願う神楽舞いをしてもらおう。子どもの頃は怖い印象の天狗も、この年齢になると幼馴染が舞っていたりする。ちなみに私の兄は横笛を吹いていた。

実家の周りには代かきを終えた田んぼや滔々と流れる最上川、ささやかな桜並木などがある、のどかな村である。この日は実家に必ず帰る。何をやるわけではないが、なかなか実家に顔を出さない私に「久しぶり」と母が私に話しかけ、互いの近況から介護話までたわいもない話をしている。あつという間に時が過ぎ夕飯づくりをする。一緒に作りながらまた話をし、お互いの愚痴が笑い話にかわる日である。帰り際はいつも同じで、お互い無理しないようにと声をかけ、気遣いながら家路につく。

お母さん、また来るから愚痴を笑って聞きあおう。無理だけしないようにね。いつまでも元気できてね。(月)